

## 外国語学部1期生の 留学体験

スタディ・アブロード・プログラムで  
カンザス大学に留学

●外国語学部3年次生  
有吉 俊さん

充実した留学生活は、その後のキャリアに大きな影響を与える。2009年に関西大学11番目の学部として開設された外国語学部では、2年次に提携大学で長期間の留学生活を送るスタディ・アブロード・プログラムを実施している。第1期生の有吉俊さんは、2010年3月から12月まで、アメリカのカンザス大学に留学した。

「カンザス大学へ行った当初は、日本人同士で行動することが多く、長期の修学旅行みたいでした(笑)。カンザス大学はバスケットボールが伝統的に強くて、環境や設備は抜群。キャンパスにはコートが6面あり、学生はいつでも自由に使えます。最初のころは勉強もきつくなかったので、授業の合間や夜によくバスケットをしました。僕は関大のバスケットボール・サークルに入っていたこともあり、アメリカ人とも一緒にプレーしましたが、体の大きさとパワーに圧倒されるばかりでした」

スタディ・アブロード・プログラムが初めての海外体験という学生もいるが、有吉さんは高校1年生の時にオーストラリアで20日間、ホームステイをして英語を学んだ経験がある。有吉さんが関西大学外国語学部を選んだ理由の一つは、全員必修の留学プログラムがあり、留学中の単位が卒業所要単位に含まれることだった。

カンザス大学では、留学生はま

有吉 俊—ありよし すぐる  
■1990(平成2)年、大阪府生まれ。大阪府立住吉高校卒業。外国語学部3年次生。2010年3月から12月まで、スタディ・アブロード・プログラムでアメリカのカンザス大学に留学。



# LEADERS NOW!



ず英語のスキルを習得するコース(リーディング・ライティング、スピーキング・リスニング、文法)に所属し、テストを受けてパスすれば大学の正規の授業を受講できる。有吉さんは比較的早くスキル系科目のテストに合格し、夏学期(6月~7月)には、子どもの発達と行動、英語のライティングの2科目を受講した。秋学期(8月~12月)には、社会学、心理学、言語学、教育学分野の4クラスでアメリカ人学生と一緒に学んだ。

「夏学期の授業がいちばんしんどかったですね。20人ぐらいの少人数で、それまでの授業とはレベルが違い、最初はほとんど理解できませんでした。でも、前もって教科書をしっかり読んで授業に出れば、先生の話が分かってきます。それに気づいて、ひたすら教科書を読みました」

有吉さんの寮のルームメイトは、「日本語べらべら」のアメリカ人だった。今は東京で留学中。翻訳や通訳の仕事を目指しているという。「向こうの学生はしっかり自立している感じがしました。ホームパーティー好きなのにも驚きました。ほとんど毎週末、どこかでホームパーティーが開かれていて、よく誘われます。そこで友達ができますし、日本語を学んでいる人と、お互いに分からないところを教え合ったりもできます。これから留学する人は、ぜひ自分から外国人の中に入っていきようしてください。みんなフレンドリーなので、無視されたりすることはありませんから」

有吉さんは帰国後、「中学か高校の英語の教員になろう」と決めた。「留学生仲間の中国人も韓国人も、英語の発音や話すことに関してはレベルが高かった。今までとは違う授業ができる教員になって、外国人と対等にしゃべれる生徒を育てたい。そのためにも、大学院で英語教育の理論をしっかり学びたい」

有吉さんは現在、4年次を飛び越して外国語教育学研究科の大学院に進む「飛び級入試」を受けるつもりで勉強している。



## 思いつきを実現したいという“想い”

「仕事も就職活動も『道』。人生を高める修業です」

●株式会社リクルート 進学カンパニー  
広報企画統括部 専門学校広報推進部  
企画開発グループ マーケティングディレクター  
村田 陽一さん —社会学部 1997年卒業—

村田陽一さんは、関西大学社会学部産業心理学科の林英夫教授(退職)のゼミでマーケティングリサーチを学んだ。アンケートやインタビューによる調査方法を、他の人の卒業論文も手伝うくらい力を入れて勉強したそうだ。それが今の仕事にそのまま生きている。

関大一高から社会学部に進んだ村田さんは、友人たちとサバイバル研究会というサークルを立ち上げた。サバイバルゲームをするわけではなく、「大学生活を楽しく生き残っていきましょう」という気軽な乗りで、みんなでキャンプに行ったりして学生生活を謳歌した。

「僕は思いつき大好き人間なんです。あれがしたい、これがしたいと、思いつくとすぐ人に話してしまいます。『妄想すぎ!』と突っ込まれることがあっても『想い』を込めると賛同してくれる人が集まって本当に実現してしまうことも度々です」

4年前、村田さんが「関西支社の支社歌を作ろう!」と呼びかけたら、部署を超えて音楽好きの仲間13人が集まった。得意先でもあり関西大学の先輩でもある音楽系専門学校の理事長の助力もあって、村田さんが口ずさんだ鼻歌のメロディは、見事に編曲され、業界最先端のスタジオで録音、完成した。



「支社歌『なにわのわ』の発表ライブは盛り上がりましたよ。歌で部署間の垣根をなくし、人の関係を密にしたいという野望に向けて、大きく前進できました(笑)」

もっとも、これには後日談がある。配布用にCDを100枚ほど用意し、社内報で欲しい人を募集したところ、無料にもかかわらず大量に余ったというオチがついてしまった。

村田さんは入社以来、専門学校の学生募集にかかわってきた。営業を始めて7年目のころ「学生募集をお手伝いしている専門学校様へ、高校生からのお問い合わせをもっともっと増やして

村田 陽一—むらた よういち  
■1974(昭和49)年、兵庫県生まれ。97年関西大学社会学部産業心理学科卒業。株式会社リクルート入社。進学カンパニーで専門学校への提案営業、企画を担当。趣味はバンド活動。好きな言葉は「おもしろきこともなき世をおもしろく」(高杉晋作)。



喜んでいただきたい」と、営業であるにもかかわらず、情報誌の企画改編提案を提出した。

従来、大量の進学情報資料が丈夫なバンドで十字に固く梱包されて、高校生の家にドサッと届いた。これでは誰も開けたいとは思わないだろう。開けたくなる工夫が必要だ。はさみやカッターなしに取り出せるようにしたり、中に何が入っているかを一目瞭然にしたり……。同僚とアイデアを出し合い、営業活動が終わってからオフィスで夜遅くまで企画書を書いた。

「実現したら絶対に何かが変わると信じてやりました。パッケージの仕様を大幅に変更したことで制作コストは上がりましたが、資料請求の数もぐんと跳ね上がり、クライアントにも満足していただけました。思いつきを形にしていく充足感も味わいましたし、それを実現したいという想いを持つことが大事だと確信しました」

仕事上の課題や宿題を一つずつこなしながら、理事長をはじめとする学校側の信頼を得た村田さんは、創立式典のプロデュースを担い、さらに学校のブランディングの企画を進めるようになった。単なる請負の仕事ではなく、「お客様と一緒に何かやっていける、伴走者のような関係性になってきたことは仕事の醍醐味です」と言う。

これから就職する、あるいは就職活動をする学生たちに、先輩からアドバイスを—。

「必ずしも目標を持たなくても、目の前の仕事、やるべきことにちゃんと対処して成し遂げることで次のステージに立つ権利、いわば通行手形が与えられます。すべてをおろそかにしないことです。ですので日々起こる出来事に注意を払ってください。なにかを極めて人生を高めることを『道』であると僕は考えます。営業職は営業を通じて自分を高めることができます。これは『営業道』です。就職活動にも『就職道』があるのではないのでしょうか。就職活動がうまくいかないのは、だめだということではなくて、自分にまだ何か足りないことを教えてくれているのだと思うのです。就職活動を通じて人生の勉強、修業をさせてもらっていると考えると頑張ってください。かならず道は拓ける……拓けるというよりはみなさんの歩みが『道』になるんです」